

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

A view from "window"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1996-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 和田, 四郎, Wada, Shiro メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1761

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



“window”から見た語法文法^{*}

和田 四郎

0. はじめに

屈折語尾が脱落した英語では語という単位が重要な意味を持つ。そしていくつかの一見独立した語が一定の語順に線状的に並ぶことにより文が形成される。しかしながら、独立形態素とも言われる語は、その名称が示すように決して単独で用いられるということはない。常に他の語（又は形態素）と共に生じ、それらは互いに何らかの特定の関係を保ちながら一つの構造体を形成するのが常である。改めて例を挙げるまでもないことではあるが、例えば、ball という語は少なくとも a や the といった限定詞を伴うであろうし、さらに hit のような動詞を、そして John という主語を伴い、文構造の一部となることによりはじめて意味を持つ。そしてこの John hit the ball という文は NP+V+NP という線的な連鎖を形成し、この連鎖は、hit を中心として John と the ball はそれぞれ「主語」「目的語」という関係にあることにより成立している。即ちそれぞれの語（句）はそのような関係概念により互いの隣接が保証されている。

ところで前置詞も通常単独で生ずることはなく、ほぼ常に XP+Prep+NP という構造に生ずる。前置詞がこのようにある構造の中でのみ生ずる依存性の高い語類であることは、一見この品詞の特異性のように思われているが、今上で述べたように、語はそもそも他の複数の語と共に一つの構造体を形成することにより用いられるという点を考えるならば、前置詞が例外的に依存性が強いということはない。今 XP を NP とするならば前置詞を含む構造は NP+Prep+NP となり、文との相違は（重要な細部をあえて無視する

ならば) 中央の要素の語類が V か Prep かという点にはかならない。前置詞がそれ単独で用いられないのは、動詞 hit も同様である。それにもかかわらず前置詞の依存性の強さは動詞の(もし同じことが言えるとするならば)それとは異なるというのが一般的な認識ではないかと思う。その相違は如何なる点に起因するのであろうか。本稿では前置詞とそれに前後する二つの NP の間に観察することができる特殊な意味的な現象を考察し、そこから導き出すことができる前置詞の本質的特徴について概観する。

1. 前置詞と「関係」ということについて

ここでもう一度文構造 NP+V+NP と前置詞構造 XP+Prep+NP を見てみよう。この二つの構造がそれぞれの形式で成立することの根拠がこの二つの構造内の構成素が互いに何らかの関係が保たれていることにあることは異論のないことであろう。しかしながら、文構造と前置詞構造との間には少なくとも一般的な認識においては大きな相違がある。即ち文構造の成立を保証する関係が、動詞を中心として一方は先行する名詞とそれとの関係即ち「主語」という関係であり、他方は動詞とそれに後続する名詞との関係即ち「目的語」という関係であるのに対して、前置詞構造では「目的語」関係は一般的に確立しているとはいうものの、前置詞に先行する名詞との関係について対応する概念が存在しない。⁽¹⁾ このことと無関係ではないと思われるが、前置詞について最も一般的な認識として注意する必要があるのは、前置詞自体が何らかの関係を表すとみなされていることである。この認識が動詞や名詞といった他の品詞とは異なる前置詞に対する大きな特徴づけをなすものである。このことは一般的な辞書のみならず各種の文献の記述においてもこの「関係づけ」という機能が前置詞の最も基本的な機能の一つとみなされていることからほぼ常識と考えてよいであろう。たとえば次は代表的な辞書の記述である。下線筆者(以下同様)。

- (1) a. “Words serving to mark relation between the noun or pronoun it governs & normally precedes & another word”
—*COD*⁵
- b. “a word governing (and usu. preceding) a noun or pronoun and expressing a relation to another word or element”
—*COD*⁶
- c. “…serving to mark the relation between two notional words”
—*OED*⁷

明らかなようにいずれも前置詞が関係を表わすという認識では変わりがない。しかし一方において、それではその関係とはそもそも如何なるものであるのかという最も根本的であるはずの問題についてまで踏み込んで明記している文献は一部を除いてほとんど存在しない。⁽²⁾ 上の引用にみられるように、同じ Oxford の辞書であるにもかかわらず、‘relation’, ‘a relation’, ‘the relation’ というように冠詞の選択が三者三様であることが象徴的に示すように、関係そのものについての明確な概念規定は避けられているのである。一般的な辞書のこのような記述に特に学問的な意味があるとは言えないとしても、Quirk *et al.* (1985: 657) も前置詞について次のように述べるにとどまるのである。

“In the most general terms, a preposition expresses a relation between two entities, one being that represented by the prepositional complement, the other by another part of the sentence.”

前置詞とそれに後続する名詞句との関係については、記述的文法、理論的文法を問わず伝統的に前置詞が目的語を「支配する (govern)」とされ、前置詞はその目的語に対して与格もしくは対格を与えると言われる。しかしこの考え方は両者の関係に対する説明として歴史的な妥当性を有すると考えることはできるが、形態的な格語尾が消失した現代英語においてそれが実質的

な意味を有するとは必ずしもいえないことは注意を要するであろう。形態的な特徴を示すのは周知のように代名詞のみであり、それを根拠に前置詞が後続の目的語を格支配をすると結論づけるのは早計である。⁽³⁾更にこの格付与の考え方は現象を後追いした記述であり、なぜそのような現象が見られるのかという根本的な問題に対する解答にはなりえないということも重要である。

それに対して一見その「関係」の中身に踏み込んだと思われる記述もないことはない。例えば *OALD*⁶ では前置詞の定義として “a word or group of words (eg *in, from, to, out of, on behalf of*) used before a noun or pronoun to show eg place, position, time or method” のような記述がみられ、また *COBUILD Grammar* にも “The most basic use of most prepositions is to indicate position and direction.” (p. 298) (下線筆者) のような記述がみられる。しかし、これらがその場しのぎであることは、前置詞 of が “place, position, time or method” や “position and direction” という意味を示すことはまずないことを考えるならば明らかである。しかし、これはあえてことさらその記述の不備を咎めるほど重要な問題では実はない。注意する必要があるのは、上記の *OALD*⁶ にしても *COBUILD* についてもその「定義」は「関係」そのものを規定するものではなく、前置詞の語義についての定義を試みとして示しているにすぎないということである。ある二つの語句が互いに隣接する時、そこには何らかの関係が成立していることは事実であるが、その際、前置詞が例えば「場所」や「方向」の意味を持つことが先行する名詞句との隣接を認可する条件とはならないのである。これらは問題が別であり、たとえていうならば、The book sells well や He sold the book において the book と sell がそれぞれの語義によりそれぞれの位置に互いに隣接しているわけではないのと同様である。前置詞を考察する場合は特にこの「語義」と「関係」を明確に区別する必要がある。

このように前置詞は何らかの意味において語と語の関係づけに関与しているとは思われるが、その実質的な中身については未知の点が多い。拙稿

(1995等) では $NP_1 + \text{Prep} + NP_2$ という構造においては $NP_1 + \text{Prep}$ には「場所的關係」が、 $\text{Prep} + NP_2$ では「所有關係」がそれぞれの要素の隣接を可能とする条件であることを示唆した。以下ではそのうちの「場所的關係」について今少し踏み込んで考察を進め、また前置詞とそれをはさむ左右の二つの名詞の意味的な關係について考察したいと思う。そのためにここでは NP_1 の名詞は window に限定し、それに後続する前置詞の(特に場所的な意味での)「語義」との関連から論ずる。

2. 場所的意味と様態

他のごく一般的な名詞がそうであるように window がこのような構造で特定の前置詞を後続させるということではなく、以下の例のようにほぼあらゆる種類の前置詞をその意味に応じて許容する。(例文は *OED*² より。)

- (2) a. a window in the rear of the sleeper that assists the driver
in backing up by increasing his visibility
b. There were strong line arrangements in the tall slit
windows behind the choir-stalls...
c. one of the windows by a small table
d. A row of small windows above the main roof of a railway
carriage.

明らかなように以上の例は window がそれぞれ(a)では sleeping car の後部空間に、(b)では聖歌隊席の背後に、(c)ではテーブルの側に、そして(d)では屋根の上方にそれぞれ位置することを表わす。⁽⁴⁾ 一般的に、for, of, with そして以下でも検討する to といった前置詞を別にすると、場所を表わすとされる前置詞が $NP_1 + \text{Prep} + NP_2$ 構造に生ずるとき、その Prep は NP_1 が存在する場所を表わしている。そしてこのような「場所的な關係」が NP_1 と Prep との隣接を可能にする基本的な關係概念の一つであることは既に述べた。

前置詞の on も場所的な意味を持つという点では例外ではない。例えば the book on the table では本はテーブルの上に位置し、このことから on は「～の上(に)」という意味があると言われ、絵が壁に掛けられている状態を意味する the picture on the wall では「～の面(に)」という意味を持つといわれる。このことは、しかしながら、on が「～の上(に)」と「～の面(に)」とに多義的であるということを必ずしも意味するものではない。なぜならばまず第一に、この二つの意味を「～の面(に)」に一般化することは直観的にもそれほど無理ではないからである。the book on the table では本はテーブルの(表)面に位置し、それが通常テーブルの上ということになる。

ところで on が「面」という意味を有することは今述べた直観のみにその根拠があるわけではない。拙稿(1995)において場所的な関係を表わす Prep+NP という構造においては Prep と NP との間には内在的な所有関係 又はいわゆる譲渡不可能所有 (inalienable possession) の関係が成立していることを述べた。このことは特に前置詞 in について顕著に観察することができる。例えば a man in the room では in は room がその語彙の内在的・必然的意味として密接な関連性を有する「中」という場所を表わす。言い換えるならば前置詞 in と後続の目的語との間には動詞とその目的語との間と同様に意味的な選択制限関係が成立し、in は目的語として「容器」となりうる名詞をとるということである。同様のことは場所的な意味を有する by, over, under 等についても、程度の差があるとはいえ、当てはまると思われるが、on 又はその意味としての「面」と後続する名詞との関係はある意味において前置詞の中でも最も密接と考えてよい。例えば OED² から次の例をみてみよう。

- (3) a. The windscreen was becoming opaque... I wound down the window on my side and the cold choking air came in.

- b. The windows on other sides are to be darkened, so as to avoid cross-lights.
- c. More often the bathroom..has a token window on the hotel corridor or no window at all, merely a ventilation shaft.
- d. The three casement windows on my left (the rightmost of which is missing a hook latch).
- e. Dark-blue ply glass panels are used beneath the windows on the north and south elevations.

window はそれぞれ my side (a), the other side (b), hotel corridor (c)に面しているのであり, (d), (e)についても on my left side, on the north side と同義であることから「面」が関係している。このように on は, in の場合と同様に, 後続の名詞には「面」としてとらえることの可能な名詞を要求する前置詞である。この点を考えるためにここで逆に「面」としてとらえられる名詞 side, surface と共起する前置詞とその前後の名詞との意味的な関係を見てみる。このような名詞は典型的には on と共起する。但しこのような名詞が例えば in と共に用いられることも次のようにないわけではない。

- (4) a. a pain in my side
- b. a depression in the surface

しかしながら (4) において注意する必要があるのは, (a)の side は単なる「面」の意味を失い, 「脇腹」の意味に転化していることであり, (b)では depression (「くぼみ」) が存在することにより, その部分は「面」がいわば消失しているということである。即ちこのような例における in の使用は, 後続の名詞の意味が本来の「面」としての意味が何らかの意味において失われることにより可能となると思われる。ここにおいても前置詞とその目的語との間には互いに意味的に内在的な必然性が保たれているといえることができる。

以上のことから、onは後続の名詞には「面」としての意味を要求する前置詞であるという結論を導き出すことができるが、上例(3)に関して今一つ考える必要のあることがある。それはonが「接触」という意味と関連している可能性があるということである。事実onにこの意味があることはほとんどすべての辞書等で記載され、その代表的な意味の一つと考えてよいであろう。しかし「面」と「接触」は少し考えてみると意味的には互いにレベルを異にする「意味」であることがわかる。即ち、前置詞は場所的な意味と密接に関連するといわれ、その意味においては「面」は明らかに場所的な概念であるといえる。しかしながら「接触」という概念は対象となるモノの存在の様態を表し、前置詞に特有の場所的な意味とみなすことはできない。ここで詳しく論ずる余裕はないが、この問題は実は前置詞を考察する上で避けて通ることのできない本質的な問題を含むと思われる。それは場所的な概念とそれに対する認識との問題である。これら両者は厳密にいうならば本質的に区別する必要があるのである。前者は客観世界に関わるいわば物理的存在の一部としての「場」であるのに対して、後者はそれを認識する主体に関連する問題である。例えば容器がここに一つあるとすると、それは内部に空間を持つことは客観的な事実であり、それがその属性である。その客観的場としての内部空間を認識する必要が生じたとき空間は主体化され、その認識は存在の様態として捉えられる。そして多くの場合、対象となるモノが内部空間の中に存在することによりこの認識は確実になる。即ち、モノがその空間の中に存在するという認識がここに成立するのである。この様態としての認識は「図と地」の認識といってもよいであろう。今述べたことは主として前置詞inに関することであるが、同様のことがonについても当てはまると思われる。その意味である「面」がそれとして認識されるためには「接触」という様態が最も適切であるということである。実はこの考え方は更に前置詞がなぜ形態変化をしないのか、なぜ場所的な意味と同時に関係的な意味を有するのか、という最も根本的な問題に解答を与えるものであるが、詳述する

余裕はない。

さて「面」と「接触」の問題はこのように峻別すべき概念であるが、両者は on という前置詞が用いられる限りあたかも紙の表裏のように密接不可分の概念である。それは今上で述べてきたことから必然的に導き出せることである。しかしながら、「接触」は認識の様態に関する意味であることから、この意味はいくつかの条件によりそれが明確に観察できる場合とできない場合がある。例えば a bottle on the table では table についての一般的知識から「接触」の意味が生じると考えることができる。しかしながら a window on my left side においては window は side と「接触」しているとはいえない。それは side がここでは漠然とした「左側の空間」を表わし、その意味において抽象的な場所であるため「接触」という意味は関連性を持つことはないからである。しかしながら、一方この my side は漠然とした「空間」を表わすが故に window と接触しているという主張も不可能ではないが、この種の議論が不毛であることは明らかである。ここでは「接触」は共起する名詞が具体的な物体を表わすか否か、又はそれらについて発話者が一般的にどのような知識を有するか、といういわゆる語用論的要因に起因すると考えるべきである。そしてこれは発話者の認識様態にはかならないのである。

ここで次の例をみてみよう。

- (5) a. A breaking of windows on the ground-floor — OED²
b. Paul looked at the window on the fourth floor.⁽⁵⁾

上の side が漠然とした空間であるのに対して、これらの the ground-floor, the fourth floor は具体的な空間を表す。しかしながら window とそれぞれの「階」との間に「接触」の意味を見て取ることは無理であり、それぞれ(a)「1階の窓」、(b)「4(5)階の窓」を意味するにすぎない。窓は建物の階に接触して存在するとは通常考えられてはいないのである。そしてさらにここでは(5)での on の使用が後続の floor により動機づけられているというこ

とに注意する必要があるであろう。既に述べたように、前置詞 on はその目的語に対して「面」としての意味を要求し、floor はその条件を満足しているのである。即ち (5) は on と関連する「面」という意味が実は文全体における意味解釈やその真偽性に影響を与えるような意味ではなく、on と floor との語彙的な選択制限として機能する、ある意味において統語的な意味である可能性を示唆すると思われる。これはしかし on が「面」としての意味を完全に失ったということの意味するものではない。この点を正確に認識することは後の to との関連で極めて重要である。前置詞 to には on に観察できるような前置詞と後続の目的語との間に成立する選択制限すら存在しないからである。それに対して、場所的な用法に関する限り on は「面」という中核的な意味を常に持ち、それが文の統語的現象に重要な機能を果たしているといえる。

以上、on は「面」という場所的な意味を持つこと、「接触」はその場所的な意味とは原則的にはレベルを異にする発話者の認識様態に関係する意味であること、そして on や in といった場所的な意味を有する前置詞は後続の目的語に対して厳しい選択制限を課すことについて述べた。ところで window は今一つ注目すべき表現がある。

3. 「世界の窓」

次の例を見てみよう。

(6) Amid such downbeat calculations, the port town that was once Japan's premier window on the outside world can take a lot of pride in what civic renewal has been achieved.

—*Time*, January 22, 1996

この window on the outside world は「(神戸は) 世界の窓」、具体的には「世界に面した窓」「世界に向けた窓」、即ち「世界が見える窓」という意味

である。同様の例は次のように各種の辞書にも記載されている。

- (7) a. (fig.) The film provides a window on the immigrant experience (=show other people what it is like) …*CIDE*
b. Newspapers provide a window on the world. …*KDEC*
c. window on the world: 'a means of observing and learning about people, esp. those of other countries.' …*OALD*⁵
d. English is a window on the world. —『ジーニアス』

前置詞 on がその目的語に対して厳しい制約を課し、「面」をその意味の特徴とする名詞に限定されることは既に見た通りである。しかしながら world という語彙からは普通そのような「面」という意味を連想することはない。従ってここで問題となるのは、もし前置詞と目的語との関係及び on の特性について今述べたことが正しいとするならば、on の目的語としての world は「面」としてとらえられているという結論になるが、これは正しいかということである。結論から述べるならば world は「面」を持つということになるが、以下この点を論ずる。

まず「面」はそもそも視覚的である。そして視覚は立体感⁶はあるとはいえ知覚の対象がモノの表面に限定されているという意味で二次元的である。即ち外界世界についての人間の視覚的知覚は本来「面」的ではないかと考えられる。今外界世界に対する視覚ということを述べた。それは a window on the world という表現が (7c) の *OALD*⁵にあるように、視覚的なイメージでとらえられているからである。一方この表現において world に先行する前置詞としては to も考えられることから、on と to の選択に関して調査を行った。その結果を次に示す。⁽⁶⁾

- (8) window on は OK, window to は NO 又は疑問 18
両方共に OK 23

window on は NO, window to は OK 1

「両方共に OK」について

on='sight' to='movement'	17
no difference (i. e. in the sense of 'sight')	2
その他	
'on'	2
'to'	2

表から明らかなように to の使用は18名が不可又は疑問を判断しているのに対して、42名中41名が on を選択し、しかもそのほとんどすべてが a window on the world を視覚的なイメージでとらえ、「世界が見える窓」という意味で一致していたのである。(to についての分析は以下で行う。) しかしながら、この表現が視覚的な意味を持つにはいま一つ理由があるように思われる。それは on に先行する名詞が window であるということである。window は外界世界との連絡を確保するという機能をその主たる目的とする概念であるが、その連絡は視覚的な方法によるのであり、物理的な移動によるのではない。逆に言えば本来物理的な移動(即ち出入り)という機能を持たないものが window なのである。それが a window to the world という表現を否定した18名にあらわれている。また on, to 共に容認した6名がやはり視覚的な意味を認めているのは window が物理的な移動のための開口部ではないという認識があるからであろう。

これに対して a window to the world を見てみよう。この表現を容認した17人はすべて移動、即ち窓から外界世界へ出るという意味を認めている。そしてその中の数名はこれについて to が「移動・方向性」という意味を有すること指摘している。しかしながら、既に他の箇所述べているように to がそのような意味を持つということは慎重に検討する必要がある。この点に関してはここでは繰り返さない。ここではただそのような移動の意味で用いられる window はもはや window ではなく、door に類似した意味を認

めているということを指摘しておきたい。即ちここには window の比喩的転用が見られるのである。そして door は次のように自由に to を後続させる。

- (9) a. There is only one door to the basement. —KDEC
b. the door to success/wealth/fame —KDEC

さて以上の the window on the world と the window to the world をさらに詳しく見ると興味ある事実を観察することができる。第一に on the world では前置詞とその目的語の間に「面」としての意味が共通に見られ、このことが、あたかも動詞とその目的語との間の選択制約のように、両者の意味的な緊密性を保証しているといえるのに対して、to the world にそのような意味的な関係を見てとることはできないことである。第二に the window to the world で window が door もしくは exit といった意味に転化しているとすると、用いられている前置詞 to は door という意味要素により動機づけられていることになる。このことは the window to the world においては the window とそれに後続する to との間に密接な意味的な関係が成立していることを示唆している。最後にこれらの問題についてその示唆するところを考察する。

NP₁+Prep+NP₂ という構造において on は NP₂ と、逆に to は NP₁ と密接な意味的な関係を形成するという対照的な特徴を示す。これは多くの前置詞がその目的語に対して与格を付与するのに対して、to は対格を支配する最大の根拠であると思われるが、この点についてはここでは詳述する余裕はない。むしろここで指摘しておきたいことは、to 及びそれを含む構造においては NP₁ と NP₂ がそれぞれ相互の語彙的なレベルにおいて内在的な必然性を有しているということである。例えば次をみてみよう。

- (10) a letter to the president/a trip to the country

(10) の例からも明らかのように to に先行するこれらの名詞はその語彙に内在する意味的必然性として「着点」を要求するといえる。前置詞 to がこのように「方向性」や「移動」に関する表現で用いられることが多いことから、そのような意味的な特徴が to に帰せられるとする議論は一見妥当性を有する。しかしながらこの議論は、「方向性」や「移動」といった概念が to の「(語彙的)意味」であるとの誤解を招いていること、そして to を含む構造が必ずしも「方向性」や「移動」等と関連するとは限られず、「所有」「因果関係」等の「意味」に関係していると考えべき証拠がいくつかあることなどから誤りであることは既に述べている。このように to が「方向性」や「移動」, 「所有」「因果関係」といった概念と密接に関連することは事実であるが、これらの概念は結局のところ「必然性」という概念によりまとめあげることができると思われる。急いで付け加えるが、この「必然性」は通常語彙が有する意味とは全く質を異にする。動詞や名詞等の主要語彙範疇は指示対象 (Entity) を有するのに対して、to にはそれが欠如しているからである。いかなる意味においても to が何らか特定の指示対象を有するという根拠はこれまで見あたらない。その理由を推測するならば、to がその前後の要素の関係においてのみ機能する関係概念であると仮定する以外に考えられないのである。関係概念としては他に文法関係, 所有関係, 因果関係等を今のところ考えることができるが、これらに共通することは、それらがいずれも特定の語彙項目によって表されていないということである。それがまさに関係概念の(7)関係概念たる所似である。⁽⁷⁾ ついでながら前置詞 to が「必然性」という関係概念を有すると仮定することに次のような例に対しても自然な説明が可能となる。

(11) Original oriel window to first floor⁽⁸⁾

この例は英国の不動産の広告である。(11) は「当然ついているはずの(特

製の) 出窓が2階についている」という意味であり、この to が「方向性」と無縁であることは明らかであろう。

このように前置詞 to は専らこの「必然性」という様態に関係し、それ故、その前後の要素を互いに語彙的に内在する必然的意味により結びつけることを可能とする前置詞である。それに対して、on は「面」という場所的な「意味」を有し、一方において先行する名詞に対しては「場所的關係」を保ち、他方において後続する名詞(目的語)に対しては(おそらく)「譲渡不可能所有」という關係を保つ。このような特質はおそらくその他の前置詞においてもあてはまる基本的な特徴である。

4. おわりに

前置詞が關係的な意味を持つことは従来から指摘されてきたことであるにもかかわらず、その關係の実質的な中身についてはほとんど論じられてはいない。しかもこれまた常識であるかのごとく前置詞は場所的な意味を有するともされてきている。ましてこの關係的な意味(機能)と場所的な意味との「關係」についての議論はあえて避けられてきたとすら思われる。しかしながら本論で述べてきたような關係概念を想定することにより、前置詞の分析は新しい様相を呈すると思われる。特に、必然性は關係的な概念であり、常に必然的に結びつけられる二つの要素を必要とする。そしてこの概念は二つの Entity の關係の様態の一つでもある。それは本論文でみた on が持つとされる「接觸」がそうであるのに対応する。その意味において認識の様態にも關係すると思われる。前置詞には、通常は、その様態的な「意味」と客觀的な実在としての場所的な意味とがあたかも紙の表裏のように共存する。しかしながら to は様態に関わる「意味」にのみ関与する。法助動詞に形態変化が欠如しているように、前置詞も形態的な変化を示さない。それは両者が共に認識様態の表明に直接的に關係する語彙であるからである。場所的な概念は、考えてみるならば、主觀的である。話者の視點、主觀により位置は變化

するからである。従って前置詞にも法的な要素が何らかの意味において関与している可能性もあるのである。

注

*本稿をまとめるにあたり、田中廣明氏、赤野一郎氏、菅山謙正氏に多くを負っている。田中氏にはe-mailによりLinguistic List上での調査の、そして赤野氏には京都外大のコーパス、菅山氏にはCOBUILDのコーパスからそれぞれ貴重な検索資料を提供していただいた。厚く感謝する。

- (1) 「修飾」がそれに相当するともいえるが、この用語は文法記述の点からみるならばあまりにも曖昧であると言わざるをえない。またここでは関係概念として「主語」「目的語」を前提として議論しているが、便宜であり、各要素の間に何らかの関係が存在していることが確認される限りその名称の如何はここでは関連しない。
- (2) この点に関してはMiller (1985)を参照されたい。
- (3) 同様の問題は、実は、動詞とその目的語についても言えると思われるが、これらの問題については別に稿を改めて論ずる必要がある。
- (4) その他に次のようにforやofの例もあるが、本稿では触れない。

- a. A similar, but more flexible system allows you to split the screen into two windows for viewing different sections of the model at once.
- b. Through the window of the production control room we can see the studio below.

但し、次の例はwindowが一種の分類詞(Classifier)のような働きをし、「和平への光明が見えた」といった意味である。

The king said there was now a window of opportunity for peace. — COBUILD²

- (5) この例は赤野氏の提供による。
- (6) 1996年2月田中廣明氏(徳島大学)に依頼し、e-mailによりLinguistic List上で行ったものである。労を厭わず快く協力してくれた同氏と極めて迅速に示唆に富む回答及びコメントを寄せてくれた42名の各国の言語研究者に心から感謝する。
- (7) この点については和田(1995a)を参照されたい。
- (8) 菅山氏提供による。

参考文献

- Anderson, J. M. 1977. *On case grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Duffley, P. J. 1992. *The English infinitive*. London: Longman.
- 池上嘉彦. 1984. 『「する」と「なる」の言語学』東京: 大修館.

- 石橋幸太郎編. 1967. 『英語語法大辞典』(第7版) 東京: 大修館.
- 小西友七. 1976. 『英語の前置詞』 東京: 大修館.
- Lyons, J. 1977. *Semantics, Vol. 2*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Miller, J. 1985. *Semantics and syntax: Parallels and connections*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, R., et al. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Sweet, H. 1953. *Anglo-Saxon Primer, 9th edition*. Oxford: Oxford University Press.
- 八木克正. 1987. 『新しい語法研究』 京都: 山口書店
- . 1996. 『ネイティブの直観に迫る語法研究』 東京: 研究社.
- 和田四郎. 1990. 「場所的認識と前置詞」『語法研究と英語教育』第12号 pp.44-55.
- . 1991 a. 「前置詞 to の機能と意味」『神戸外大論叢』第42巻第5号 pp.1-20.
- . 1991 b. 「前置詞句主語文と前置詞」『現代英語学の歩み』pp.141-150. 東京: 開拓社.
- . 1992. 「To 不定詞における「方向性」」『神戸外大論叢』第43巻第4号 pp.65-87.
- . 1993 a. 「To 不定詞の「目的」と「結果」用法」加藤文彦・上村哲彦編『ことば・意味・かたち—英米文学—批評と読解』pp.1-18. 東京: 愛育社.
- . 1993 b. 「help 文における to の出沒」衣笠忠治・赤野一郎・内田聖二編『英語基礎語彙の文法』pp.55-65. 東京: 英宝社.
- . 1994 a. 「help 文における to の出沒が示唆するもの」英語語法文法学会『英語語法文法研究』(創刊号) pp.21-35.
- . 1994 b. 「非語彙的要素としての will/may/can」『語法研究と英語教育』第16号 pp.3-18.
- . 1995 a. 「所有の文法」奈良女子大学文学部英語・英米文学科編『尾崎寄春・大沼雅彦両教授退官記念論文集』pp.39-50. 京都: あぼろん社.
- . 1995 b. 「不定詞の形容詞的用法管見」『神戸外大論叢』第46巻第1号 pp.1-16.
- Wierzbicka, A. 1988. *The semantics of grammar*. Amsterdam: John Benjamins.

参照辞書

- Cambridge International Dictionary of English (CIDE)*
Collins COBUILD English Dictionary (COBUILD)
*The Concise Oxford Dictionary*⁵ (COD⁵)
*The Concise Oxford Dictionary*⁸ (COD⁸)

『ジーニアス英和辞典』(第2版)『ジーニアス』
The Kenkyusha Dictionary of English Collocations (KDEC)
Longman Dictionary of Contemporary English³ (LDOCE³)
Oxford Advanced Learner's Dictionary⁵ (OALD⁵)
The Oxford English Dictionary² (OED²)